



# 昭和批評大系



昭和20年代

番町書房

昭和批評大系 第三卷（昭和20年代）

昭和四十三年三月十五日 印刷  
昭和四十三年三月二十五日 発行

定価 一八〇〇円

編者代表 村松剛

佐伯彰 大久保典夫

発行所 遠藤左介

番町書房

東京都中央区京橋三丁目五番地

電話 東京 五六七—〇三一

振替 東京 一五八四四

印刷 凸版印刷株式会社

製本 株式会社板倉製本

昭和批評大系

第三卷（昭和20年代）

目次

占領のもたらしたもの

村松 剛 三

## 第一部

近代日本文學の發想

福田 恆 存 三

藝術 歴史 人間

本多 秋 五 三

終戦の思想

河上 徹 太 郎 三

第二の青春

荒 正 人 三

失はれた青春

竹 山 道 雄 三

ひとつの反措定

平 野 謙 三

反語的精神

林 達 夫 三

小説の間歇に語る

— 散文の運命 —

神 西 清 三

第二藝術

— 現代俳句について —

桑 原 武 夫 三

近代文學の運命

フィクションについて

デカダンスの文學

短歌的抒情に抗して

文學的脱出

小林秀雄論

重症者の兇器

笑ひの喪失

傳統と正統の問題

散文藝術の性格

動物・植物・鑑物

—坂口安吾論—

「日本製」ニヒリズム

—ヘド的に—

美貌の皇后

戀愛について

—夷齋筆談—

中野好夫 二三

渡邊一夫 二七

山室 靜 一五

小野十三郎 一五

中村眞一郎 一七

矢内原伊作 一六

三島由紀夫 一八

中村光夫 一八

深瀬基寛 三〇

伊藤 整 三三

花田清輝 三三

三好十郎 二六

龜井勝一郎 二六

石川 淳 三七

私小説の二律背反

平野謙 二六

占領下の文學

中村光夫 三五

賸の季節(抄)

十返肇 三四

頽廢の根源について

小田切秀雄 三七

—日本近代文學の場合—

小林秀雄 三〇

ボードレール

吉田健一 三三

東西文學論

寺田透 三九

「文体論」のためのノート

福田恆存 三六

平和論の進め方についての疑問

—どう覺悟をきめたらよいか—

詩の自覺の歴史

—古典と現代文學—

日本文化の雜種性

加藤周一 三九

われらにとって美は存在するか

—作品評價の混亂について—

マルクス主義文學理論批判

服部達 四三

—文學は上部構造か—

高橋義孝 四三

## 第二部

悲しき兵隊

火野葦平 四〇

『新生』創刊號編輯後記

青山虎之助 四〇

歌聲よ、おこれ

—新日本文學會の由來—

宮本百合子 四〇

『文學時標』發刊のことば

荒正人他 四〇

『世代』創刊號編輯後記

掛川長平 四〇

『高原』創刊號編輯後記

臼井吉見 四〇

展望

本多秋五他 四〇

『近代文學』同人雜記

伊吹武彦 四〇

ジャン・ポール・サルトルについて

中野達彦 四〇

コエーボロイ

久保田正文 四〇

—あとがき—

寺崎浩 四〇

歌壇展望

久保田正文 四〇

『風雪』創刊號編輯後記

寺崎浩 四〇



『群像』創作合評會（抄）

立原道造における進歩性と反動性

『日本小説』創刊號編輯後記

肉體が人間である

『文學界』復刊號編集後記

得能五郎と鳴海仙吉

『綜合文化』宣言

一匹と九十九匹と

—ひとつの反時代的考察—

戦後の近代文學研究

『大和文學』創刊號編集後記

横光利一

マチネ・ポエティクの試作に就て

『荒地』の立場

太宰よ、さよなら

『方舟』創刊號發刊の言葉

『個性』編集後記

青野季吉他 四七七

杉浦明平 四七〇

和田芳恵 四七四

田村泰次郎 四七五

龜井勝一郎 四七八

なかのしげはる 四七九

綜合文化協會 四八一

福田恆存 四八二

猪野謙二 四八一

瀧井芳次 四八〇

川端康成 四八〇

三好達治 四八二

鮎川信夫 四八七

中島健藏 四八八

四九三

四九三

日本文學における自我の問題

『死靈』自序

第二の新人

『序曲』創刊號編集後記

「哭壁」について

『戦後文學』宣言

Bクラスの辯

戦後文學賞決定まで

藤村の破戒に就て

「ちっぽけなアヴァンチュール」のことで

牧瀬氏に答える

雲の會

「武藏野夫人」の意圖

民族文學への道

「眞空地帯」について

國民文學の問題點

第三の新人

瀬沼茂樹 四〇

埴谷雄高 三三

西村孝次 三六

三島由紀夫他 三二

浅見淵 三二

平田次三郎 三九

河盛好藏 三三

月曜書房編集部 三七

佐藤春夫 三六

なかのしげはる 三三

岸田國士 三三

大岡昇平 三〇

丸山静 三四

富士正晴 三五

竹内好 三七

山本健吉 三三

『近代文學』の功罪

―戦後派文学と第三の新人―

露伴に遷れ

―ロマンの本質―

原民喜の自殺をめぐる

村松 剛他 奏

田中西二郎 奏三

佐佐木基一 奏七

研究ノート

第一部 研究ノート

第二部 研究ノート

口絵写真解説

年表(昭和20年代)

大久保典夫 奏四

紅野敏郎 奏五

紅野敏郎 奏六

高橋春雄 奏三

装釘 上口睦人



## 凡 例

- 一、収録作品を第一部・第二部に分け、相互に補足しあつて、有機的・立体的な批評史を編成するようにつとめた。
- 一、第一部にはおよそ主流的な論文をあつめ、第二部では資料的な面に重点を置いて編集した。
- 一、本文は原文の正確な復原につとめて、できるかぎり初出しにしたがつた。
- 一、作品の配列は、おおむね発表年次順によつた。
- 一、各作品の用字、かなづかい、句読などは、原則として原文のままとし、傍点・ふり仮名などは編集部で適宜取捨した。
- 一、研究ノート・解説などに際しては、書名・人名・引用文に限り、正字・旧かなづかいを用いた。

昭和批評大系 第三卷（昭和20年代）



占領のもたらしたものの

村  
松

剛



## I

敗戦の日、——八月十五日は、暑い日だった。

「——遂に敗けたのだ。戦いに破れたのだ。」

夏の太陽がカッカと燃えている。眼に痛い光線。烈日の下に敗戦を知らされた。

蟬がしきりと鳴いている。音はそれだけだ。静かだ。」

高見順の、「敗戦日記」の一節である。あの日はぼくは東京にいたが、天皇の放送のあったあと、真夏の午下りの異様な静寂は、いまでも忘れがたい。青い空に白い入道雲が立ち、沈黙は日本ぜんたいを支配したかのように思われた。

同じ日の夜、鈴木貫太郎首相の軍に告げる放送につづいて、ラジオはベートーヴェンの曲を、——第五交響曲だったと思う——流したきり、黙ってしまった。下手な放送をして連合軍を怒らせても困るし、どうしていいかわからなかったのだろう。

敗戦、降伏は、日本人には歴史上はじめての経験である。その衝撃は、目がくらむほど大きなものだった。高見順は同じ日記のなかで、天皇の放送の直前に夫人とかわした会話をつたえている。

『「ここで天皇陛下が、朕とともに死んでくれとおつしやつたら、みんな死ぬわね』

と妻が言った。私もその氣持だった。」

平野謙は昭和二十一年の文芸時評の冒頭に、「終戦の詔書」からうけた衝撃をしるしている。

「昭和二十年八月十五日、ラジオのない一鑛山の寮に假寓していた私は、やはり午後になつてはじめて敗戦の事實を知つた。青天の霹靂のようなその報知に、私はただ呆然自失した。(中略)私は『終戦の詔書』を読み、御前會議の経過を讀んだ。私の頭には、詔書のなかの『五内爲ニ裂ク』という破格の言葉と、白の手袋を龍顔にあてられたという、廟議決定の経過報告には不似合な一節とだけが灼けつくように残つた。私は、ひとり聲を吞んで泣いた。わけもなくあふれる涙をどうしようもなかったの